

隨泉寺寺報

2003年5月号

第393号

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺 降誕会法座

講師 東善坊住職 龍花 康丸師

講題 「元気に生きる」

五月雨に物思ひをれば ほととぎす夜ふかく鳴きていづちゆくらむ
(紀友則・古今集153・)

「五月雨の降る夜明け前に寝られずにいると、郭公が鳴いて、一体どの方角へゆくのか」

「五月雨を 集めてはやし 最上川」

松尾芭蕉

五月の歳時記をみると雨ばかりです。よく考えてみると旧暦の五月は今の六月ですから梅雨の真っ盛りです。雨の歌が多いのも無理ありません。五月晴れというのも近頃のことです。

5月8日～10日まで京都・奈良・大阪に研修旅行に行きます。どうか雨が降りませんように。しかし考えてみると五月は田植えや畑では雨が必要な時なのですね。自分の都合であめが欲しいとか晴れて欲しいとか。無量寿経の中に「不能遠観」とあります。自分のことしか見えません。遠くを見る事が出来ないことです。自分の都合でしか見れないことです。

6月の法座予定

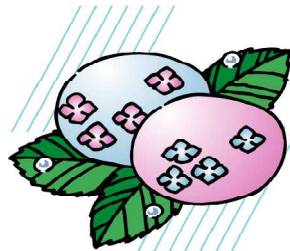
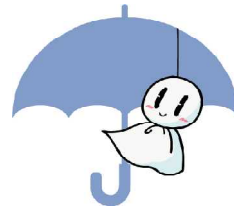
5月 2日午後6時より……本部役員会

5月14日昼席午後1時より……降誕会法座

5月14日夜席午後7時半より……出張法座 上平原集会所

5月15日朝席午前10時より……降誕会法座 初参式

5月15日昼席午後 1時より……降誕会法座



☆合同初参式

5月15日降誕会法座の朝席の後、合同初参式を開催いたしました。

今年は井原の浜野浩光・愛子さんの長男 **浜野浩一郎さん**と望ヶ丘の田村康樹・昌恵さんの長男 **田村亮太さん**の2名の方の初参式を行いました。

初参式は初めてお寺にお参りをして、仏様の願いの中に人生が始まることを形に表し、さらに周りのものが『仏の子』として育てる思いを確かめるものです。ご両親の腕に抱かれておまいりに来る赤ちゃんは、家族の笑顔に囲まれています。

家族はまだ言葉の分からない赤ちゃんに話しかけ、ともに手を合わせます。そろって仏様の前に座り、やさしい子に育ててほしい、さち多き人生を歩んでほしいと願うのです。

私もこうしているんな人から願われて、そだってきたんだなあとおもいます。私が思う前から、願いの中に入ったのです。仏様も私が願う前から、力いっぱい生き抜いてほしいと願っておられます。それが本願です。



☆研修旅行



5月8日から10日まで、京都・奈良・大阪へ研修旅行に行ってきた。今回の参加者は32名と少し寂しかったのですが、大谷本廟に納骨したり、おかみそりを受けられたり、とても有意義な旅行でした。また親鸞聖人がお徳度された照蓮院、ご誕生の地である日野誕生院、東本願寺の涉成園、浄瑠璃寺などはめずらしくも有り、楽しいものでした。しかし残念なことに門信徒会会長の原敏雄さんが病気で倒れられました。元気にまたお参りして下さることを念じます。

☆若婦人研修会

6月15日午前10時より若婦人研修会を開催します。子育てや、お仕事で、なかなかお寺に参るのも難しいことですが、暇を作ってご参加ください。

☆御礼

門信徒会へ 金一封 古堀 政子殿 香典返しに返えて
永代経懇志 貳拾萬円 古堀 政子殿 故古堀 利登様 特別永代経志として
貳拾萬円 長野 秀男殿 故長野 武雄様 特別永代経志として
特別懇志 貳拾萬円 藤原 和幸殿 故藤原 琢而様懇志

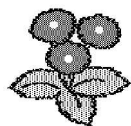
世界に一つだけの花

作詞 槇原 敬之

作曲 槇原 敬之

唄 SMAP

NO.1 にならなくてもいい もともと特別な Only one
花屋の店先に並んだ いろんな花を見ていた
ひとそれぞれ好みはあるけど どれもみんなきれいだね
この中で誰が一番だなんて 争う事もしないで
バケツの中誇らしげに しゃんと胸を張っている
それなのに僕ら人間は どうしてこうも比べたがる？
一人一人違うのに その中で一番になりたがる？
そうさ 僕らは 世界に一つだけの花
一人一人違う種を持つ その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい
困ったように笑いながら ずっと迷ってる人がある
頑張ってる花はどれも きれいだから仕方ないね
やっと店から出てきた その人が抱えていた
色とりどりの花束とうれしそうな横顔
名前も知らなかったけれど あの日僕に笑顔くれた
誰も気づかないような場所で 咲いてた花のように
そうさ 僕らも 世界に一つだけの花一人一人違う種を持つ
その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい
小さい花や大きな花 一つとして同じものはないから
NO.1 にならなくてもいい もともと特別な Only one



ひとは作業所の寺尾先生の話を知りました。
知的障害を持った仲間のお話です。人並みということで話があったとき、いつも他の人と比べて優劣を競い、勝ち負けを争い、みんな同じだったら安心する。作業所の仲間の一人がポツリと「わしは わしなみで えかろうがい」といわれたそうです。なんと素晴らしい言葉でしょう。その話を聞きながら、スマップのこの歌を思い出していました。それぞれがそれぞれでみんないい。みんなちがってみんないい。



母を偲ぶ

平成15年の幕開けは、12日に姉が亡くなり、母が追うようになくなるまでの2週間、娘を思う母のやりきれない悲しい胸の痛み、親子の深い絆を身をもって示してくれました。それだけに続けての別れは、今までにない心身共に強いダメージを受けました。

特に変わったこともなく普段通りの生活のなか、母とのあっけない別れとなり思い出の詰まった我が家での暮らしは辛いものです。母は小さな体で六人(二男四女)の子供をもうけ、若い頃には苦勞の多い日々だったと親戚より聞かされておりました。しかし母は愚痴を言うこともなく、私たちを育ててくれました。どちらかというとなり男性的な性格で、事を選ぶに当たって、皆の意見等聞く耳を持たない欠点もありましたが、今何をすべきか一本筋の通った言動は、最後迄生かされておりました。反面八十五歳とはいえ、女性としての嗜みだと毎日お化粧を欠かさず、お酒落心もあり、かわいいおばあちゃんとして、孫、曾孫の人氣もあり、膝の上はいつも誰かが座っていた程です。その上、ボケ防止だと云って、筆を走らせ、気づいたことを書き留める努力もしておりました。子供たち、孫、曾孫へと綴られた文は、ほのぼのとした内容が多く、各家族の安全と幸福をいつも願っていてくれたのがよく分かりました。

母と優しい主人との三人、楽しく暮らした日々感謝しながら、母が私たちに教えてくれたことを、今後子供、孫へと引き継ぐことが、恩返しであろうと思っております。

お母ちゃん、いろいろ、種を蒔いてくれて本当に有難うございました。三十七年前に亡くなったお父ちゃんに、お姉ちゃんと一緒に皆のこと話してあげてくださいね。後になりましたが、生前お世話になりました、皆々様、隨泉寺様、心より御礼申し上げます。

平成15年3月

鈴木 善恵

